

資料紹介

加茂雄三ほか著『国際情勢ベーシックシリーズ
ラテンアメリカ』自由国民社 1999年 437ページ

本書は『現代用語の基礎知識』を補完するシリーズで、ラテンアメリカ各地域の政治経済の基本情報と最近の時事問題を解説している。

この地域の第一線の研究者が、各国の概要のほか、地域全体の経済、民主主義、地域統合、文化について今日までの流れをトピックごとに担当しており、単に事実を述べるにとどまらず、歴史や社会的背景を通じて時事問題を解説しているところが本書の特長である。特に第Ⅱ章中米諸国・パナマと第Ⅳ章カリブ海地域については新聞などでも報道される機会が少なく日本語での情報収集が難しいが、本書では1990年代以降の時事問題についても詳しく解説しており、この地域の今日を理解するのに役立つ。

地図や図表が多用されており視覚的にもわかりやすい。また、各国を横並びに比較する表や、重要な事柄をコンパクトに解説した「コラム」など、必要な情報を調べることができる文献としても工夫が凝らされている。

各章末に詳しい引用・参考文献が掲載されているほか、巻末に索引と各執筆者による解説が付いた参考文献ガイドが掲載されており、初学者はもちろん、各国の現状を手っ取り早く理解したい場合にも役立つ。

(清水達也)

増田義郎・山田睦男編『ラテン・アメリカ史：
メキシコ・中央アメリカ・カリブ海』山川出版
社 1999年 本文390ページ 付録93ページ

本書は、山川出版社の新版世界各国史シリーズの第25巻にあたり、メキシコ・中米・カリブ地域諸国の歴史を網羅している。第26巻がラテン・アメリカ史の南米編になっているが、こちらは未刊である。

前半が先コロンブス期から欧州列強による征服期

と植民地時代の記述で、この地域全体の共通する政治・経済・社会問題と独立運動を、域内各国の比較を交えて論じている。後半は時期的には三つに分かれている。19世紀の独立国家としての困難な歩みをたどったあと、20世紀前半および後半に分けて各国の歴史を国別に記述する。植民地期・独立後を通じ、章立てとしてはメキシコと中央アメリカ・カリブ海の2章に分かれているが、実際にはその中でも中米・カリブ諸国のかかなりの小国まで個別に取り上げられている。とくにこれまでほとんど取り上げられなかったことのないカリブ地域の小国の歴史にも紙数がさかれている点は特記される。また巻末には年表、それぞれの国の参考文献がついており、参考になる。ラテンアメリカ地域の北半分を占める国々について、効率よく、また最近の歴史まで学ぶことのできる格好の書と言える。

(山岡加奈子)

国本伊代編『ラテンアメリカ 新しい社会と女性』新評論 2000年 390ページ

本書は、ラテンアメリカの女性に関する研究では豊富な蓄積を持つ編者らのグループによる2冊目の成果である。1作目の刊行から15年の月日を経て、その間に日本におけるラテンアメリカ研究者の層は厚みを増した。新たに若手を加えて、組上に上げられた国の数も6カ国から13カ国へと増え、読み応えのある内容となっている。

本書は総論にあたる序章と、国・地域ごとの事情を扱う15の章から構成されている。各章に共通する論点は、女性の社会的、経済的、政治的地位向上に関わる運動や制度改革の歴史的展開、およびそれらの成果のさまざまな指標による検証である。フェミニズム研究としてはきわめてオーソドックスなスタイルといえよう。このように論点を絞って叙述が展開されるため、多様な方面に議論が拡散しやすいテーマであるにもかかわらず、また、取り上げる国・

地域の多さにもかかわらず、まとまりのよい仕上がりととなっている。各章の冒頭にその国の女性のありかたを象徴するような引用文や重要な歴史事項を記した年表を載せる等、読みやすくする工夫も随所に見られ、丁寧に編まれた本であるとの印象を持った。ラテンアメリカ女性研究の入門書として、また女性という切り口からのラテンアメリカ史の参考書として広く読まれていい本である。編者らのグループがさらに研究を深められ、引き続き第3冊目が刊行されることを期待したい。

(星野妙子)

ウィリアム・ロウ；ヴィヴィアン・シェリング
(澤田眞治・向山恭一訳)『記憶と近代：ラテンアメリカの民衆文化』現代企画室（インディアス群書20）1999年 386ページ＋人名索引ivページ。

ラテンアメリカの民衆文化が現代までどのように存在してきたかをたどる。それは、近代的なものとは異質ではあるが、両者の間に画然とした境界が引かれたうえでその特質が分析されるようなものでないこと、近代化の中で、適応し、衝突し、浸透していくものであることが指摘され、そのような立場から、第1章は植民地期から独立まで、第2章はその後の民衆文化の成立、第3章は民衆文化とポピュリズム、社会運動の関係、第4章は高級とされる「文学」の中にある民衆的なものの分析がなされている。

個々の分析は必ずしも鋭いものではなく、あるいは分析というより単なる叙述に近い場合も多い。しかし、十分な先行研究の蓄積がないということを考慮すれば、本書の価値は、扱っている題材の広さ、それらを一定の視点でつなげようとする方法的努力にあるといえよう。

研究者ばかりでなく、例えば、第2章では現在のラテンアメリカで大きな人気を持つ「テレノベラ」（テレビ小説）と呼ばれるテレビで放映されるメロドラマの分析が行なわれるなど、現代のラテンアメリカ社会、文化を理解しようとするより幅広い読者にとつ

ても興味深い題材が多く扱われている。ただし、おそらく原著を反映して訳も難解であり、また丁寧な訳注があるとはいえ、扱われている事実についてもある程度知っている場合がいくつかはないと、読み続ける意欲を持続させるのが困難であろう。残念ながら、民衆文化研究は一般読者向けにはなりにくいようである。

(米村明夫)

ジェニファー・ハーバリー（中川聡子他訳）『勇気の架け橋：グアテマラ内戦とマヤ先住民民族・ゲリラの戦いの記録』解放出版社 1999年 301ページ

1996年のグアテマラ政府・ゲリラ（グアテマラ民族解放連合）間の和平合意によって、ラテンアメリカ最後の内戦が終結した。本書は、人権擁護の活動を進めているアメリカ人弁護士が記録したゲリラ戦士達の証言集である。第1章は、1970年代から80年代初期までに彼らがどのようにゲリラ活動に入ったか、第2章はゲリラの生活を、第3章は90年代に若い世代がどのように前の世代、さらにその前の世代の志を受け継いで戦っているかを扱っている。章立ては以上のようなのだが、いずれも幹部というよりは一般の革命兵士（男女）達を扱い、彼らの動機、戦いや活動における気持ちのありようが、単純に、それだけに鮮明に語られている。感動的なのは、家族、友、仲間への信頼を自らの生と死に重ね合わせて大切にしていること、したがってまた互いについての「記憶」をととても大切にしていること、そして「記憶」が同時に彼らの未来への想いとつながっていることである。この証言の記録の成立自体がそうした態度の現われともなっている。

研究者は、ゲリラ闘争の「歴史的」意義を「客観的」に分析し、あるいはこうした証言を「資料」「史料」として「冷静」に扱うことを要請されているし、それから逃れることはできない。しかし、そうした研究の

意味を反省することは可能である。本書の証言は、先進国政府の政策、マスコミ、研究の意味・関わり方——特に、社会的な対立があからさまな暴力によるコントロールされることを日常とする社会を対象とした場合のそれ——に対する問いかけでもある。訳者あとがき、N・チョムスキーによる解説は、この問いかけを考えるヒントになるであろう。

(米村明夫)

田尻鉄也『ブラジル社会の歴史物語』毎日新聞社 1998年 224ページ

新聞社、農協、農業誌の編集など多方面で活躍した著者が遺したブラジル社会と歴史に関する著作を集成したものである。書名と同名の章のほか、ブラジルの農作物、農業を中心としたブラジル産業の歴史、キリスト教とブラジル、外国人移民の歴史、農協の歴史とブラジル農業の行方の各章から成る。本書を通じて著者が発する問いはブラジルの後発性の原因は何かである。それに対する答えを奴隷制が残した労働軽視の価値観、教育の遅れ、モラルの低さなどに見いだしている。著者は全体としてブラジルが変化し近代化することについて悲観的であるが、他方で、南部に入植したドイツ、オランダその他のヨーロッパとりわけプロテスタント系移民が示す、天職である農業への献身、技術改良への努力、子弟に対する教育などに光明を見いだしている。農業協同組合の考察の部分も秀逸である。経済変動のなか日系移住者が設立したものを含め多くの農協が破綻した。その原因を著者は互助その他農協活動の思想、精神の欠如に見ている。読者は本書の各所で著者のブラジル社会に対する深い理解に触れることになる。

(小池洋一)

増田義郎・柳田利夫著『ペルー 太平洋とアンデスの国——近代史と日系社会——』中央公論新社 1999年 374ページ

日本人ペルー移住100周年を記念して編纂された本書は、スペイン植民地時代からのペルー近現代史を概観した第Ⅰ部「近代史の中のペルー」と第2次世界大戦からの日系移民の歴史と今日の現状をまとめた第Ⅱ部「ペルーの日系社会」からなる。

第Ⅰ部では各時代を政治体制や社会の特色によって区分している。それぞれについて、当時の世界や南米の動き、国内の経済状況を説明した上で、各政権の施政やそれに対する人々の反応を描いている。例えば、ペルーでよく見られる数々のクラブが、上流階級やスポーツの団体にとどまらず、高地の農村からリマにやってきた移住者の相互扶助組織として機能したのは興味深い。そのほか、日本とペルーとの関わりについて、国交・移住の開始や、日本人がペルーの鉱山に進出しようとして失敗したエピソードなどを紹介している。

第Ⅱ部は、戦中の日系人に対する扱いや敗戦後に日系社会が復興される様子、さらに今日の日系社会の現状や今までの日系人とは違う新たな「ニッケイ」のアイデンティティが現れつつあることなどを描いている。特に、1990年の大統領選に出馬したフジモリ候補に立候補辞退要請を行なった日系人協会など日系社会の反応や、89年以降本格化した日本への出稼ぎの動向や問題点を、具体的な事例を交えて紹介している点が興味深い。

巻末に人名索引と関係年表を収録している。

(清水達也)